

名古屋教区平和祈願ミサ2025

「いのちを守る 平和を築く」



北陸地区
日本のカトリック教会は広島や長崎の原爆投下



を思い起こし平和を祈願するため毎年8月6日から15日までの10日間「平和旬間」と定めて

いる。北陸ブロックでは本年は8月11日に、松浦悟郎司教を福井教会に迎えて平和祈願ミサを行った。北陸3県富山・石川・福井から信徒70名、司祭は6名（九里彰神父、盧照結神父、片岡義博神父、ヨハネス・ヴィアンネ・ラマ神父、クマール・アフアリ・アルン神父、フリッツ・ポノンバン神父）が参加し、とても素晴らしいミサと

なった。午前10時からまず皆で聖母マリアと共に、神に向かつて平和を願う唱えららザリオの祈りを唱えた。その後、米軍戦略爆撃調査団が撮影した原爆投下後の広島・長崎の様子や、手当てを受けている生々しい被爆者の映像「にんげんをかえせ」を見た。原爆の恐ろしさ、悲惨さを具体的に表現しているこの映像を見て、私達は国籍が違っても心を一つにして原爆の悲劇、そして平和の大切さを改めて深く感じざるを得なかった。涙を流す人も何人かいた。

ミサの説教の中で松浦司教は次のように話した。「私達は微力かもしれないが、決して無力ではない。平和のために一人一人がやるべき小さなことであっても、皆がそうすることで大きな力になる。」司教のこの勧めに答えて、まず私達は愛をもって各々のやり方で、自分自身の心と立場から始めることにより平和を実現しよう。

今回の平和祈願ミサには英語ミサのクワイア・グループとポルトガル語ミサのクワイア・グループも加わって、元気な声で何曲も聖歌を歌い、とても素晴らしいミサになった。ミサ後は、国際的な雰囲気の中での茶話会で終えることができた。ただ、平和を実現するという私達の使命はまだ終わっていない。これから引き続き、思い・言葉・行いによって真の平和が私達の心のすみずみにまで行き渡るように、と願わずにはいられない。



（福井教会主任 フレデリック・フリッツ神父）



1954年のビキニ環礁水爆実験では、第五福竜丸を含む683隻のマグロ漁船が被曝し、海産物の放射能汚染による風評被害で魚屋や寿司屋が打撃を受けた。

た。漁船乗組員には米国から補償があったが、広島・長崎の被爆者には国の保証がなかった。この不条理が原水爆禁止世界大会の創設につながり、市民による国家賠償請求と核兵器廃絶の声が高まったと述べた。また、核兵器禁止条約が2021年に発効したにもかかわらず、唯一の戦争被爆国である日本が未だ批准していない現状に強い危機感を示し、ノーベル平和賞を受賞したICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）や核戦争防止国際医師会議、日本被団協の活動にも触れ、「戦争を始めるのは指導者、止めるのは市民」「今こそ市民の声が必要だ」と

力強く訴えた。講演後、ジュード神父から改めて「平和を実現する人は幸いです」との言葉があった。第二部の平和祈願ミサには200人が参加。聖書朗読では、イザヤ書（32・15）で「正義と平和」が、ヨハネ福音書（14・23）で「主の平和」が語られた。松浦悟郎司教の説教では、戦争が加害者・被害者双方の人間性を奪うこと、原爆が一瞬で日常を破壊する現実が語られた。当日ミサ献金74,392円と、前日三河ブロックでの献金52,000円は「広島教区の核なき世界基金」へ送られた。

（多治見教会社会委員会 藤本正夫）

2025年8月10日から12日の3日間、教区中高校生会のヒロシマ巡礼が行われた。今回は中高校生が7名参加し、青年を含むスタッフ78名と共に巡礼を行った。1日目は朝の9時に教区センターに集まり、主日ミサに与った後、戦争をテーマとした音楽劇を鑑賞するために下関へと出発した。しかし、当日は中国地方や九州を中心に豪雨が発生し、下関への高速道路が通行止めとなったため、やむなく2日目に宿泊する予定であった広島教区の鞆町教

3日目は白浜満司教と会った後、世界平和記念聖堂の地下聖堂にて派遣ミサにあずかり、名古屋への帰路に就いた。参加した中高校生からは次のような感想が寄せられた。「原爆のことを考え、リアルを知って、より平和のことに考えていることができた。今までの過ちや苦しみを二度と繰り返してはいけないという気持ちで行動に移したいと思いました。」

東海地区

名古屋教区平和祈願ミサが8月10日に布池教会で開催され、第一部、記録映画「にんげんをかえせ」の鑑賞と、被爆二世・太田智恵子氏（瀬戸教会）

による講演「平和を実現する人は幸いです」には135人が参加した。映画は米軍が1945〜46年に撮影した広島・長崎の被爆直後の映像と、35年後の被爆者本人の証言を重ねた20分の短

編ドキュメンタリーで、「目をそらさないでください」というナレーションの言葉通り、核兵器が人間性を奪う現実を訴える。太田氏は、長崎で被爆した祖父の体験を通して、爆心地近くでの惨状、戦後の差別や沈黙を強いられた日々、そして被爆者の苦悩を語った。

た。漁船乗組員には米国から補償があったが、広島・長崎の被爆者には国の保証がなかった。この不条理が原水爆禁止世界大会の創設につながり、市民による国家賠償請求と核兵器廃絶の声が高まったと述べた。また、核兵器禁止条約が2021年に発効したにもかかわらず、唯一の戦争被爆国である日本が未だ批准していない現状に強い危機感を示し、ノーベル平和賞を受賞したICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）や核戦争防止国際医師会議、日本被団協の活動にも触れ、「戦争を始めるのは指導者、止めるのは市民」「今こそ市民の声が必要だ」と

力強く訴えた。講演後、ジュード神父から改めて「平和を実現する人は幸いです」との言葉があった。第二部の平和祈願ミサには200人が参加。聖書朗読では、イザヤ書（32・15）で「正義と平和」が、ヨハネ福音書（14・23）で「主の平和」が語られた。松浦悟郎司教の説教では、戦争が加害者・被害者双方の人間性を奪うこと、原爆が一瞬で日常を破壊する現実が語られた。当日ミサ献金74,392円と、前日三河ブロックでの献金52,000円は「広島教区の核なき世界基金」へ送られた。

（多治見教会社会委員会 藤本正夫）

中高生会ヒロシマ巡礼

2025年8月10日から12日の3日間、教区中高校生会のヒロシマ巡礼が行われた。今回は中高校生が7名参加し、青年を含むスタッフ78名と共に巡礼を行った。1日目は朝の9時に教区センターに集まり、主日ミサに与った後、戦争をテーマとした音楽劇を鑑賞するために下関へと出発した。しかし、当日は中国地方や九州を中心に豪雨が発生し、下関への高速道路が通行止めとなったため、やむなく2日目に宿泊する予定であった広島教区の鞆町教

3日目は白浜満司教と会った後、世界平和記念聖堂の地下聖堂にて派遣ミサにあずかり、名古屋への帰路に就いた。参加した中高校生からは次のような感想が寄せられた。「原爆のことを考え、リアルを知って、より平和のことに考えていることができた。今までの過ちや苦しみを二度と繰り返してはいけないという気持ちで行動に移したいと思いました。」



第459号
2025年10月
〒461-0004
名古屋市東区葵2丁目6-35
カトリック名古屋教区広報部
電話 (052) 935-2223
FAX (052) 935-2254
news@nagoya.catholic.jp
印刷所 株式会社 荒川印刷
毎月第1日曜日発行



2025年 通常聖年
希望の巡礼者となつて
聖年をともに歩みましょう

教区ホームページ

福音のひびき

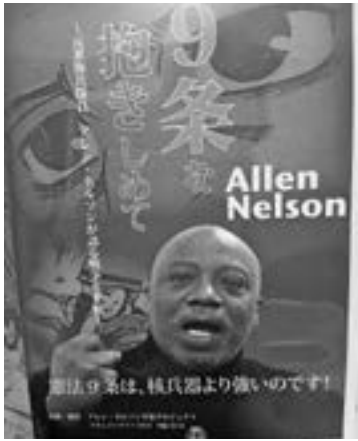
10月の説教者

- | | |
|-----|---------------------------------------|
| 5日 | 年間第27主日
ウイリアム・リンガマ・クロメン
(南山教会) |
| 12日 | 年間第28主日
ブルム・アーノルド
(瑞浪教会) |
| 19日 | 年間第29主日
トラン・ハン・アントニー・助祭
(神言修道会) |
| 26日 | 年間第30主日
デ・グスマン・ドンドン・ファヴラ
(南山教会) |

〔高校2年生〕
「特に印象的だったのは原爆ドームです。資料館であの日に起きたことを実際に見て、感じて、学び、いかに今の時代が平和なのかを思い知らされました。平和にするために自分にできる行動を考えていきたいです。(中学1年生)」
「原爆ドームを見たときは複雑な気持ちになったし、写真や動画を見て戦争は本当にダメだと思ったし、平和について改めて考えることができました。(中学1年生)」
中高生たちが共に広島へ行って平和について学び考えることができて、実り多き巡礼となった。
(教区中高生会担当委員)

第17回平和祈念の集い

「平和をつなぐ」



し、ネルソンさんに戦争に対する考え方を180度変えさせる出来事が起きる。奇襲攻撃に遭い近くの壕に逃げ込むに耐え必死に力を振り絞り赤ん坊を産んだ。その時、自分の母親もこんな風に自分を産んでくれたのか、ベトナム人もアメリカ人も同じ心を持つ人間だと。帰還後PTSDに苦しむが、自らの過ちを認めることをきっかけに立ち直った。戦争や暴力は決して平和をもたらさない。ネルソンさんは沖縄の問題や平和憲法など日本人にとっても貴重なことを、命尽きるまで語りかけた。「憲法9条はいかなる核兵器より強い」と。

8月3日、第17回平和祈念の集い「平和をつなぐ」が南山教会マリア館ホールにて開催された。戦後80年にあたり会場は大勢の参加者で埋め尽くされ、関心の高さを実感した。ドキュメンタリー映画「9条を抱きしめて」元米軍海兵隊員アレックス・ネルソンが語る戦争と平和」を鑑賞後、松浦悟郎司教の講演で映画の内容を深めた。
ネルソンさんは1947年アメリカニューヨークで生まれた。貧困生活から逃れようと海兵隊に入隊し19歳でベトナムの最前線に派遣された。軍隊では平和については教えられず、殺すことが仕事だと繰り返し教え込まれ、次第に人間の心を失っていった。しか

《東海地区 一粒会の集い 江南教会にて》

6月29日(日)「一粒の集い」が江南教会で
西村由美子委員長、ス



サント・プリヨ江南教会主任司祭、平田豊彦一粒会指導司祭の挨拶の後、岡崎教会主任司祭のモルク・フランシスクス・アシジ神父(神言会)による講演「神言会の召命」を聞いた。モルク神父は

当教会のプリヨ神父(聖心布教会)と同じインドネシア出身である。講演会の内容は、神言会の設立からの歴史、各国で活躍する司祭、そして特にインドネシア、日本で活動する司祭の様子を紹介された。修道会司祭の活動内容を知り、教区司祭、修道司祭どちらにしても、金銭的サポートが必要であり、一粒会の活動の意義を再確認した。

講演に続いて、松浦悟郎司教と5人の司祭、助祭による共同司式でミサが執り行われた。松浦司教は、説教でこの日が聖ペトロ聖パウロ使徒の日ということから、この二人の聖人の性格の違いを紹介し、各々違った役割があり、そのうえで聖ベ

《北陸地区 一粒会の集い 小矢部教会にて》

8月31日の午後、北陸地区の一粒会の集いが小矢部教会で開催された。冒頭、一粒会担当司祭で



ある平田豊彦神父の紹介で近藤真理生神学生より近況報告を受けた。その後、主任司祭である小川満神父が高岡教会より到着し、田舎で司祭が不足している現状、自身がブラジル人司牧担当でもあ

り、富山県外の小松、福井、鯖江各教会でのポルトガル語のミサで多忙な日々の報告を兼ねた挨拶があった。
講師は神言会所属、インドネシアは風光明媚なフロレス島出身、五反城教会主任司祭のアルデイ神父。冒頭で「主よ、あなたの道を」を全員で歌い、緊張がほぐれた中で「私の召命」と題し、映像や収録音声を用いて分かりやすくお話をし

折つても、ゆるしの心が無ければその願いは天国に届かないのだ」と諭されたとのこと。家庭と教会と学校が信仰教育で協力し合う環境で育つ中で、ミサの叙唱を唱える神父の歌声や所作に憧れて初めて司祭になりた

頂いた。その中で、家族特に親からの教えを引き合いに出しての体験談に参加者は身を乗り出して真剣に聞く姿が多く見られた。「祈る前に家族全員ゆるし合う心を持たねばならない」と親に言われて育った。「どんなに

トロには天の国のカギを授けるという召命を与えた。ミサの最後には、「召命を求める祈り」を全員で唱えた。
最後に、筆者は、このレポートを書く際に大きな「気づき」をした。この催しの冒頭で、プリヨ神父が、挨拶で、「早くここから、追い出してください」と話され「???」だった。そして、今回のモルク神父の講演内容から、神言会、聖心布教会などの宣教修道会にとつては、宣教のために日本にきているのだから、一粒会などの神学生へのサポートにより教区司祭が増えれば、その結果、人的余裕ができて、修道会としては、世界の中でまだ宣教司牧されていない地域に派遣できることに



日本カトリック障害者連絡協議会 名古屋大会が開催されますよ！

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

私が、ボランティアという言葉を聞くたびに、ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。

ボランティアは、自由意思を意味するラテン語の「ボランタス」に由来している。一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、それぞれの技能や時間などをすすんで他人のために提供し、かつ社会奉仕することに意義があるとされる。また、市民の自由意思や責任において行う活動であり、市民が権利の主体として成長していく側面もあるとされている。



カトリック看護協会名古屋支部(JCNA) 「司教様との集い」

毎年恒例となっている「司教様との集い」を7月5日に顧問の松浦悟郎司教様との集い 暮林響神父(神言会)をはじめ、普段の定例会ではなかなか会えない懐かしい仲間も加わり会員8名、会員の友人3名で旧川名山聖霊修道院の一室で開催した。参加者は看護師の資格を生かして様々な場で働いており保健師として妊産婦の支援、ホスピス病

棟や老人保健施設、修道会の仲間の介護、こども園での子供達の健康管理、喫茶店を通して地域の方の健康サポート。一般病院で管理職として働く人、長年看護教育に従事し退職したばかりで今後の生き方を模索中の

人、反対に看護現場とは離れていたが最近になって障がい者施設で働くことになった人など色々な現場で人とかわる時間を過ごしている人々が、それぞれの想いや悩みを分かち合う時間をもった。松浦司教は私たちの想いや悩みからの気づきを拾い上げカトリック看護師とは「いのちのはじま

りからおわりを大切にする」「いのちの尊厳を守る」この普遍的なことを大切にしていこうと伝えた。また、人生の中で辛い苦しい体験を通して、人間には絶望を感じることがある中でも、その中から自分で意味を見出し、学びを得ることから共感したり関わることで、その人がその人らしく立ち上がることができ

ることを話した。会の終了後に、自分は看護が好きでこの道を選び今まで色々な形で人と関わり今後もその道を歩いていくのだからと、喜びのような気持ちに満たされた。

（横山美佐子）

（横山美佐子）

（横山美佐子）

名古屋教区カリタス福祉委員会・ 北陸地方、聖年巡礼の旅



6月13日(金)と14日(土)の2日間、聖年指定教会である北陸プロックの福井教会、七尾教会、金沢教会、富山教会の4つの小教区を巡礼した。能登半島地震で被災した人々、今なお厳しい生活

を強いられている人々のために追悼と復興祈願を捧げた。委員たちは、巡礼で共に祈ることを目的として、巡礼教会でロザリオを唱え、黙想し、祈った。七尾教会と富山教会では、同行した委員長の

山野聖嗣神父(港教会主任)の司式により、追悼及び復興祈願の意向でミサを捧げた。この聖年巡礼での気づきについて

①ミサや祈りの内に復興に向かっていた。七尾教会への道中、あちこちで道路の復旧工事があり、片側通行になっていた。道路のひび割れがいたるところに散見し、被災の凄まじさを感じた。

巡礼教会では被災直後の苦労話、復興に向けての取組み、ボランティア活動の現状などの話を聞き、ともにミサに与かった。

②若者の力の大きさを感じた。富山教会の信徒は、能登半島地震発災当初、ボランティア活動に参加し、他人を支えることは自分のためだ、と

の感想を述べていた。1人の力は微々たるものであるが、その思いの力は大なるものとの考えであった。

③笑顔は復興への足がかり。富山教会の信徒画家である日女史は、画集の「ごあいさつ」で「キリスト教の信仰は私の心の支え、絵を描き始める時は短い祈りをしてから描きます。祈りと信仰を深め、絵と人とを愛し天国に入りたい」と力強く述べていた。

以上の3点である。それぞれの教会で新しい出会い、また思いがけない温かい再会があり、楽しく分かち合いができた。神がともにいて導いてくださったことに感謝した。

(教区カリタス福祉委員 岡村 要(東海教会))

計報

チブリアノ・ボンタツキヨ神父様帰天(略歴)

1935年2月 イタリア生まれ

1951年7月 カルメル会で初誓願

1958年3月 司祭叙階

1960年 来日

1966年 1978年 金沢教会主任

2002年 2019年 金沢教会主任

2020年より石川地区協力司祭

2025年8月11日 帰天

十ご冥福をお祈りします。

カトリック名古屋教区主催

「名古屋教区殉教者祭」のお知らせ

日時 10月13日(月・祝) 10:30~
内容 殉教者顕彰ミサ 司式 ミカエル松浦悟郎司教
場所 西山浄土宗 清涼山 栄国寺 キリシタン顕彰碑前
名古屋市中区橋1丁目21-38 TEL 052-321-5307
*顕彰碑、墓碑建立区域への立ち入りはご遠慮下さい。
アクセス 地下鉄名城線「東別院」下車 4番出口・EVより徒歩9分
公共交通機関、又は車でお越しの方は一般有料駐車場をご利用下さい。
問合せ 名古屋教区宣教司牧評議会事務局(担当 早川和彦助祭)
TEL 052-935-2223

2025年度 正義と平和委員会 学習会

第4回「悪夢のリニア新幹線工事—今こそ見直しが必要なのではないか」

講師 大沼淳一氏(環境問題研究者)
日時 11月1日(土) 10:30~12:00
会場 福信館2階(名古屋市中区葵2-6-29、布池教会東)
地下鉄東山線新栄駅から徒歩8分、桜通線車道駅から徒歩8分、JR中央本線千種駅から徒歩9分
参加 自由
主催 カトリック名古屋教区正義と平和委員会
連絡先 浅野幸治 asano@toyota-ti.ac.jp または 090-8860-3627

美濃・尾張キリシタン顕彰ミサと講演会のご案内

日時 11月3日(月・祝) 9:30~15:30
場所 カトリック美濃加茂教会
講師 浅井太郎神父(名古屋教区殉教者顕彰委員会委員長)
テーマ 「濃尾崩れについて」
ミサ 司式 浅井太郎神父
問合せ 名古屋教区殉教者顕彰委員会事務局 早川助祭まで
TEL: 052-936-8366 E-mail: k.hayakawa@nagoya.catholic.jp
*詳細は各小教区に掲示されるチラシで確認してください。

人事のお知らせ

・北陸プロック石川地区司祭チーム
九里彰神父(モデルラツール、窄口松雄神父、ピエトロ・ザンケツ神父、ペトロ・ノ・ヒチヨル神父協力司祭
片岡義博神父(石川地区、富山地区の協力司祭)、ロー・ダム神父(北陸プロック、ベトナム人司牧担当、ヨハンネス・ヴィアンネ・ラマ神父(通称ジョニー)
・愛岐プロック岐阜教会助任司祭
ルカ・ベンゾ神父(パリ外国宣教会)
・城南プロック港教会助任司祭
ペトロ平野哲也神父(聖アウグスチノ修道会)
(4面に続く)

